

保育者養成機関における男子学生への 声楽指導の在り方 —— 2006 年度「音楽Ⅱ（声楽）」の授業実践を通して ——

鈴木 慎一郎

1. 目的

本稿の目的は、保育者養成機関での声楽学習における男子学生が抱える課題を指摘し、それを解決するための教育内容と方法を検討することである。

米山文明は、「一般に子どもの声には男女差がない。性ホルモンの分泌によって12歳頃に思春期を迎え、男性の声は大幅に下がって男女の声域の差はほぼ1オクターブになる¹」と述べる。

一方、伊藤勝志が大学生を対象とした調査によると、発声持続時間は、男子平均22秒（最小11秒，最大38秒），女子16秒（最小8秒，最大32秒），ピッチ周波数は、男子平均131Hz（110-180Hz），女子平均263Hz（210-340Hz）と男女差があることが指摘されている²。

ところで小崎恭弘の『男性保育士物語』に記されているように、女子学生が大部分を占める保育

者養成機関において男子学生が声楽学習を行うには数々の課題があると思われる³。

近年、保育者養成機関における声楽指導の重要性が議論され、嶋田由美⁴、成田眞・小林育子⁵、奥村正子らの先行研究がある。また、今後、男性保育士者の増加が見込まれる。とはいうものの、男子学生を焦点に当てた研究はまだ希少である⁷。そこで本稿では、声楽学習に取り組んでいる男子学生の姿をたどり、彼らがどのような意識を抱いていたかについて明らかにしたい。実践の考察を行う際には、学生の授業感想、教師メモ、授業記録、映像資料、アンケート調査結果を用いる。

2. 事例

表1は、2006（平成18）年度白梅学園短期大学保育科における音楽関係授業科目を一覧にしたものである。

表1 2006（平成18）年度白梅学園短期大学保育科における音楽関係授業科目

授業科目名	開講時期	単位	卒業	幼稚園	保育士	備 考
音楽Ⅰ	1年通年 1コマ	1	選択	必修	必修	前期：基礎理論 45分，ピアノ 45分 後期：声楽 45分，ピアノ 45分
音楽Ⅱ	2年通年 1コマ	1	選択	必修	必修	通年：声楽 45分，ピアノ 45分
保育内容 表現	2年前期 2コマ	2	選択	必修	必修	1コマ（15回）を造形， もう1コマは，7.5回を音楽，7.5回を身体表現
子どもの音 楽の世界	2年後期 1コマ	1	選択	選必	選必	「世界の児童文学」「幼児の運動遊び」「子どもの活動と自然」「お話の世界」「子どもの音楽の世界」「子どもの造形と遊び」「遊びと身体表現」「乳児の遊び」から4科目 選択必修

出典 『2006 学生便覧』白梅学園短期大学，から作成。

注 下線は筆者による。

声楽に関する内容は、第1学年後期の「音楽Ⅰ」と第2学年通年の「音楽Ⅱ」で扱われている。本稿では、筆者が実践を行った「音楽Ⅱ（声楽）」を事例対象とする。詳細は以下の通りである。

- 2006年度白梅学園短期大学保育科第2学年対象の「音楽Ⅱ（声楽）」（通年30回、全受講生123名。1クラス31名程度）
- 抽出対象：男子学生全3名（学生A、学生B、学生C。学生Aと学生Bは同じクラスで受講）

表2は、2006年度「音楽Ⅱ（声楽）」の授業内容を一覧にしたものである。1クラス31名程度の学生がいるため、個人レッスンではなく、クラス授業の形態で進め、主に合唱の学習を行った。

表2 「音楽Ⅱ（声楽）」授業内容

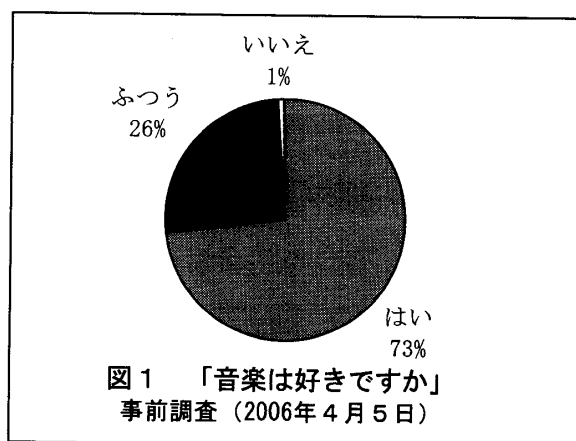
回	月 日	内 容
1	4 / 5	オリエンテーション
2	4 / 12	『コンコーネ 50 番』《Believe》
3	4 / 19	『コンコーネ 50 番』《Believe》
4	4 / 26	《Dona Nobis Pacem》
5	4 / 26	『サウンド オブ ミュージック』鑑賞
6	4 / 26	『サウンド オブ ミュージック』鑑賞
7	5 / 10	声の衛生・教育実習事前指導
8	6 / 7	ストレッチと発声
9	6 / 14	《Dona Nobis Pacem》
10	6 / 21	声域チェック、《もののけ姫》
11	6 / 21	『サウンド オブ ミュージック』鑑賞
12	6 / 21	『サウンド オブ ミュージック』鑑賞
13	6 / 28	《夏の思い出》
14	7 / 5	《夏の思い出》
15	7 / 12	《夏の思い出》発表会
16	9 / 27	前期の復習、《学園歌》
17	10 / 4	《Santa Lucia》
18	10 / 11	《Santa Lucia》『コンコーネ 50 番』
19	10 / 18	《Santa Lucia》『コールユーブンゲン』
20	10 / 25	《Ombra mai fu》
21	11 / 15	《Ombra mai fu》
22	11 / 22	《Ombra mai fu》
23	11 / 29	《トラのパンツ》《フニクリ フニクラ》
24	12 / 6	《フニクリ フニクラ》

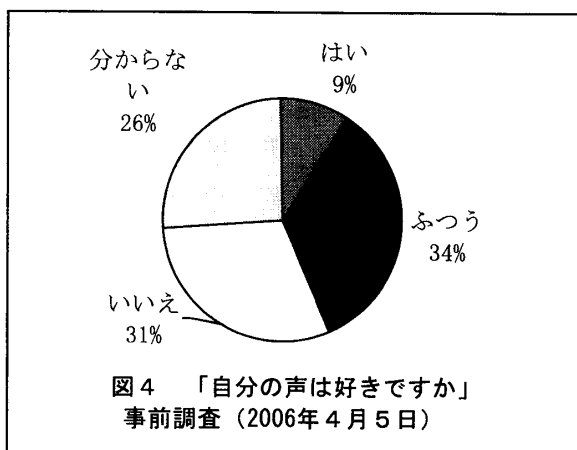
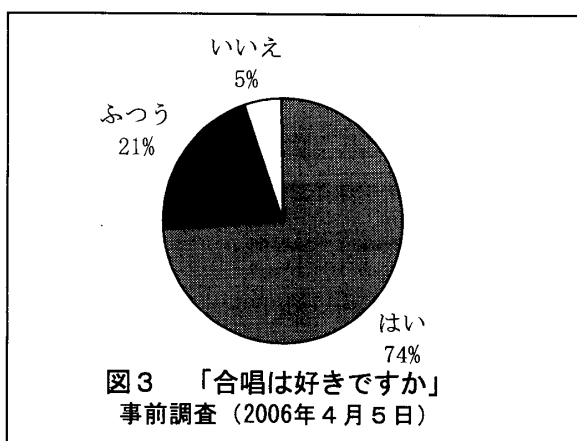
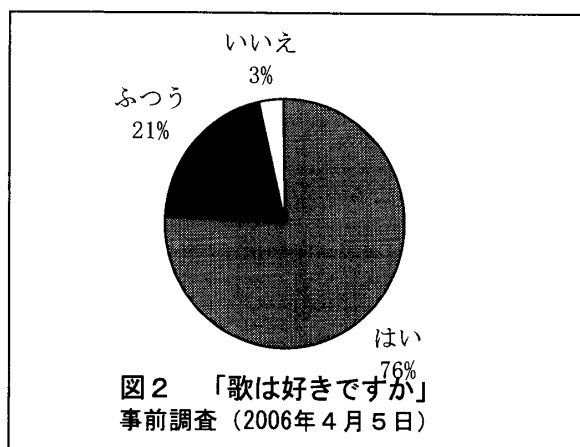
25	12 / 13	《フニクリ フニクラ》
26	12 / 20	クリスマスソング
27	1 / 10	《ふるさと》《学園歌》
28	1 / 17	《ふるさと》《学園歌》
29	1 / 24	《ふるさと》《学園歌》
30	2 / 7	学期末試験

注 毎時間の授業の導入では、学生のピアノ伴奏で、幼児曲を歌っている。

実践を始めるにあたり、学生の意識を探るためにアンケート調査を実施した（2006年4月5日）。図1から図4はその結果の一部である。この結果から、学生たちは音楽、歌、合唱に対する関心・意欲が比較的高いことが分かる。その一方で、自分の声を好きと回答した学生は、全体の9%と少ない（図4）。

男子学生の結果を見ると、「音楽は好きですか」の質問に対して、学生Aは「ふつう」、学生Bは「はい」。「歌は好きですか」については、学生A、学生Bともに「はい」。「合唱は好きですか」については、学生A「ふつう」、学生B「はい」。「自分の声は好きですか」については、学生A「ふつう」、学生B「いいえ」という回答を得た。このように男子学生は特に音楽、歌、合唱に対して抵抗感を抱いているわけではない。なお、学生Cは、アンケート調査を実施した日に欠席したため、回答を得ていない。





3. 実践

学生Cは、第2回目の4月12日の授業後の感想で次のように記している。

今日は腹式呼吸や歌を歌ったりした。鼻で呼吸する大切さを学んだ。僕は昔からよく口で息を吸っていて親に鼻で息を吸なさいとよく言われていた。鼻で息をする方が健康的にも全然違うと言っていた。自分もたまに口呼吸

になってしまうのでできるだけ鼻で呼吸ができるようにしたい。

男の子一人なので歌う時に少しはずかしいし、歌いづらいと思いました。

4月12日 学生Cの授業感想

注 下線は筆者による（以下同様）。

学生Cは、女子学生（29名）の中において男子一人であることに對し、少しためらいを感じている。学生A、学生Bは、学生Cと別クラスで、二人の男子学生で受講しているとはいうものの、圧倒的に女子学生（29名）が大部分を占めているという状況は同じである。

このような状況下での課題については、以下のように整理できる。

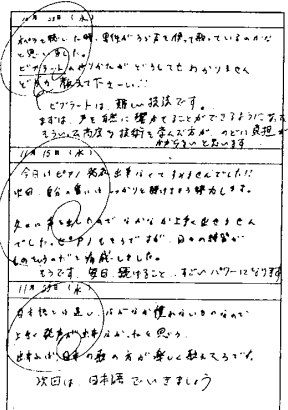
- ・先行研究で明らかにされている通り、発声持続時間、ピッチ周波数が男女により異なる。
- ・女子が大部分を占める中で男子が声を出すことに抵抗を感じやすい。

上記の課題を少しでも解消するために、教材については、次の点を留意して選曲した。

- ・男子学生にとっても音域的に無理のない曲。合唱曲については、男子学生は低音パートを担当。
- ・難解な曲は避ける。

その他、筆者は毎時間、学生が記入する授業感想に対する朱書き（資料1）、授業の中での言葉掛け（写真1）、個別指導等を組み合わせ、彼らの抱えるためらいを払拭し、表現意欲の向上を育むための支援を行った。

授業感想



資料1 授業感想



写真1 授業での言葉掛け（2006年12月13日）

以下、紙幅の関係上、前期に実践した「《夏の思い出》を重唱しよう」、後期の「《フニクリフニクラ》を合唱しよう」に絞って事例として取り上げたい。

1) 《夏の思い出》を重唱しよう

6月28日から《夏の思い出》⁸の重唱に取り組んだ。男子学生は全員低音パートを担当した。

表3は、その際の学生Bの授業感想である。ここから、学生Bが男声を気にしながらも、意欲的に練習に取り組んでいる姿がうかがわれる。

ここでは、7月12日の《夏の思い出》発表会における当日の学生A、学生Bの取り組みを考察したい。

表4は、7月12日の発表が始まる直前の様子を記録したものである。学生たちはピアノのレッスンを終えて音楽室に入ってくるやいなや、自主的に練習を始めた。筆者は何も指示を出していな

表3 授業感想《夏の思い出》を重唱しよう

回	月 日	学 生 B
13	6/28	<p>低音パートをやるのははじめてなので頑張りたいと思います。</p> <p>今日、前に来て歌ったのですが、やはり、みんなの声が後ろから支えてくれると歌いやすいと思いました。</p> <p>男声が近くて大きな声を出すと、女声の人は歌いにくいと思いますが、大きな声で歌います。</p>
14	7/5	<p>今日は高音2人、低音3人に分かれて練習しました。自分の音が聞こえて歌いやすい分、間違えてしまうと全体の影響が大きいな、と思いました。また、男声2人だからみんな歌いにくいのかな。他のグループの歌声を聞くと、ああ、ここを気を付けようとか、勉強になると思いました。</p>
15	7/12	<p>直前まで音の確認がよくできていなかったのが本番かなり緊張しました。やっぱ緊張しているとうまく歌えないものだと思います。とりあえず顔は上げようと思ったのですがニヤニヤしていたかもしれません。でもこの緊張感がいいと思いました。</p> <p>テストの前に発声練習をしたいと思います。</p>

い。このクラスには、音楽に対する興味・関心を強く抱いている学生が多い。また、発表会というプレッシャーからこのような行為をとったのだろう。

学生A、学生Bとも発表会当日であるにもかかわらず、自分たちが歌う低音パートの旋律を忘れてしまったようである。表4には、音取りに葛藤している姿が表れている。途中4分47秒の時点で、学生Aは筆者に正しい音程について尋ねてきた。彼らと出会い3ヶ月経たということもあり、学生と筆者との信頼関係が少しずつできてきた。こうした関係が築けてきたからこそ、疑問点等について質問し、解決することができるようになってきたと考える。

表4 発表直前の練習（2006年7月12日）

時間	学 生 の 様 子	教 師 の 支 援
0 : 00	<ul style="list-style-type: none"> 音楽室に入ってきた学生は、自主的に練習を始める（特に決まっていたわけではないけれども、ピアノも学生が担当）。学生A、学生Bともに最初はあまり気持ちが入っていない様子。 全体の雰囲気を受け、学生A、学生Bは、歌い始める。しかしながら、先週練習をした低音パートの旋律を忘れてしまい、正しい音程で歌うことができない。高音パートの音量が増すにつれ、ますます音程がつかない様子。 	<ul style="list-style-type: none"> 学生の自主性を尊重し、しばらく見守る。
4 : 47	<ul style="list-style-type: none"> 学生A「先生…」と助けを求める。 少し音程がつかめたようだが、まだ耳を手で隠しながら歌っている。 繰り返し練習している。 	<ul style="list-style-type: none"> 学生Aの求めに応じ、数回範唱する。
7 : 40		<ul style="list-style-type: none"> 再度、学生A、学生Bの近くで範唱をする。
8 : 10	<ul style="list-style-type: none"> 学生A「OK！」 	
8 : 26	<ul style="list-style-type: none"> 学生A「お、できた！」 	
9 : 19	<ul style="list-style-type: none"> 学生Bは、まだ耳を押さえながら歌っている。 また高音部につられてしまう。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師の伴奏により全員で合唱する。
10 : 8	<ul style="list-style-type: none"> 正しい音程をつかもうと真剣に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 音程が不正確な箇所を取り出し、部分練習を繰り返す。
11 : 17	（これ以降、各グループの発表へと続く）	

注 録画ビデオから作成。



写真2 練習の様子（2006年7月12日）

発表では、ピアノ伴奏付きとアカペラの2つの方法で行った。

<ピアノ伴奏付きの発表>

発表直前まで男子学生の音程が不安定であった。しかし、発表では低音パートの旋律をしっかり歌っていた。特に学生Aの音程はしっ

かりし、美声が響いていた。学生Aは歌い終わった姿も堂々としていた。

7月12日 教師メモ

<アカペラでの発表>

学生Aだけではなく、学生Bの音程も正確になり、自信が出てきた様子。発表する前、した後とも表情に余裕が出てきた。

7月12日 教師メモ

以上、男子学生は、発表当日にもかかわらず、まだ音程が正しくつかめていなかった。しかし、集中して練習に取り組んだ甲斐あり、2回行った発表では堂々と重唱することができた。また、無事歌い終わった後には爽快さを感じさせる表情を示し、男子学生の表現意欲の高まりが感じ取れる。

2) 《フニクリ フニクラ》を合唱しよう

表2に示した通り、後期ではイタリアの作品を中心に学習を進めた。11月29日には、《トラのパンツ》⁹を聴いた後、《フニクリ フニクラ》¹⁰の合唱に取り組んだ。ここでも男子学生全員は低音パートを担当した。

合唱部分は、第72小節から始まり、主旋律（高音パート）の長3度下に副旋律（低音パート）が付けられているに過ぎず（下3度重ね）、特に変化しない（譜例1）。しかし、男子に限らず、低音パートの学生は、音取りにかなり苦勞し、時間を要した。

譜例1 《フニクリ フニクラ》 bar. 72-76

出典 右近義徳編『世界名歌選集 中声用』全音楽譜出版社、1993年、293頁。

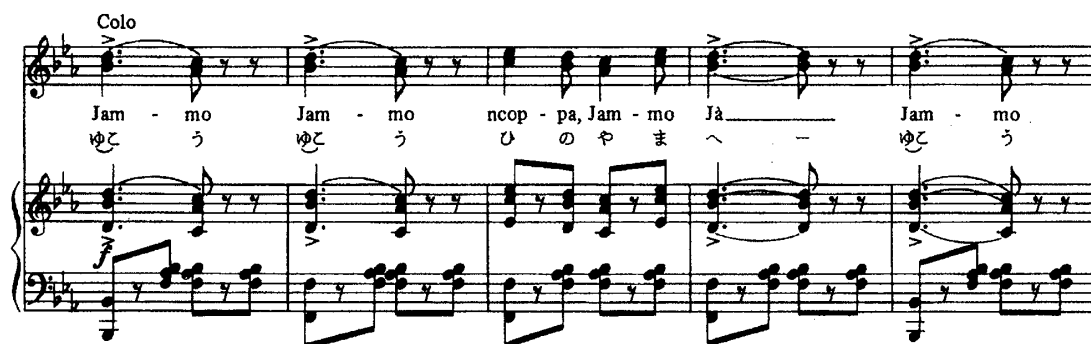


表5は、その時期の教師メモである。

表5 教師メモ《フニクリフニクラ》
を合唱しよう

回	月 日	教 師 メ モ
23	11/29	《フニクリフニクラ》の導入として、《トラのパンツ》を流した。保育科の学生だけあり、体を揺らし歌詞を口ずさみながら聴いていた。後期は、《Santa Lucia》《Ombra mai fu》とイタリアものが続いている。歌唱力はアップしているのだが、日本語の歌を歌いたいという声も少し出てきている。特に学生Aは、私に「先生、日本語の歌が歌いたいです」と言ってきた。
24	12/6	高音と低音に分かれる部分について練習した。低音パートは音取りに苦勞している様子。男子学生へは個別にアドバイスをするなど配慮した。「難しい」と言いつつも熱心に取り組んでいた。
25	12/13	前回より、低音パートの音程も安定してきた。学生B、学生Cの声の調子はよい様子。

では、12月13日の練習の様子をみてみよう。表5にも示したように、《フニクリフニクラ》の学習3回目ということもあり、学生たちはこの曲に慣れてきた。筆者は、低音パートの学生のみ、ピアノの周りに集めた。自分の席からピアノの近くまで移動する際に、すでに学生Bは、意欲的に歌っている。練習の様子を録画した映像を聴いても、学生Bの声はよく聴こえる。かといって、女子学生の中に違和感があるといった感じもしない。女子学生が大部分を占める中で男の声を出すということに抵抗がなくなってきた様子である。

この日の学習の最後に前奏から始まり、1番、2番と通して歌った。1番については、二声に分かれる第72小節から第75小節までの男子学生の音程は不安定である。第76小節から正確に近くなり、学生Aの音程が落ち着いた。学生Bも学生Aの声に合わせている様子である。しかし、2番になると、学生Bは、別の高音のパートを開き直って歌っている。そのとき学生Aや周辺の女子学生は、少し驚き、笑っている。このように、学生Bは、低音パートの副旋律を覚えるのに苦勞して

いることが分かる。この傾向は、《夏の思い出》の学習でも見られた。この点については課題でもあるが、少数の男子学生の集団であるにもかかわらず、自信を持って自分の声を出せるようになってきた点に対しては評価できる。



写真3 練習の様子（2006年12月13日）

4. 考察

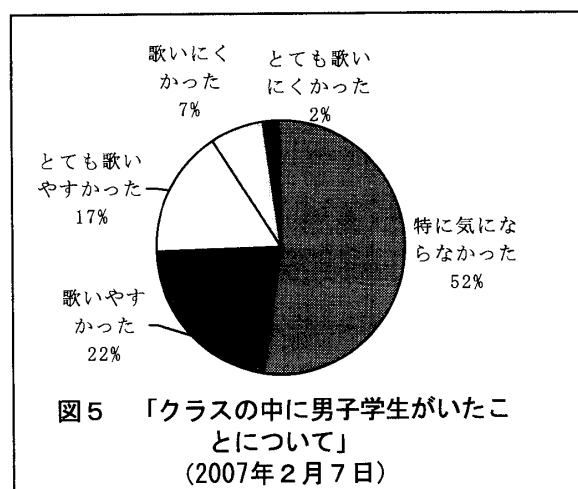
4月当初、「男の子一人なので歌う時に少し恥ずかしいし、歌いづらい」と訴えていた学生Cですら、積極的に歌うようになってきた。10月18日の授業感想には、「学園歌と《Santa Lucia》を歌うのが楽しみです。廊下などでもついつい口ずさんでしまうほどです」と記している。

また、筆者が9月27日の授業の最後に「次回は《Santa Lucia》を歌うよ」と予告した途端、学生Bは「先生、高校で《Santa Lucia》をやったことがあります」と言い、他の学生の前で独唱し始めた。

その他、イタリア語の歌に抵抗を感じていた学生Aについても「慣れれば皆ずいぶんスムーズに歌えていた」（12月20日授業感想）と自分たちの演奏に対し満足しながら振り返っている。

図5は、通年30回の授業終了後、男子学生と一緒に受講した女子学生54名から得たアンケート調査結果である。クラスの中に男子学生がいたことに対して否定的な感想を持った女子学生は、9%と限られていた。肯定的な感想を持った理由として「合唱の際、男性の声があると仕上がりも

楽しい」「男性の声があるというのは面白くて、歌っていて楽しかったから」等が挙がっている。



一方、男子学生の一人からは、「自分の歌に自信がないので男声が目立つのはやりにくかった。けど、楽しく歌えました」という回答があった（2007年2月7日実施アンケート調査）。しかし、その直後彼らと対話したところ、「4月当初は、歌いにくいとすごく感じたけれども、だんだん慣れてきました」と肯定的な反応を得た。また、表6に示したように、学生A、学生Bが、自分の声について「好き」と回答し、自分の声に自信を持ち始めた。

表6 自分の声について

	学生A	学生B	学生C
4月5日	ふつう	嫌い	調査の日、欠席
2月7日	好き	好き	分からない

以上、女子学生が大部分を占める保育者養成機関において、男子学生の表現意欲を高めるという点では、本実践は有効に働いた。今後、配慮すべき点は、以下の通りである。

- ・クラス編成をする際、学籍番号順番等機械的に振り分けるのではなく、男子学生については1

つのクラスに固める方がよい。

なお、本実践は筆者の短期大学での初年度の実践であるだけに課題も多い。今後、さらに研鑽を積んでいきたい。

付記

本稿は、「白梅学園大学・白梅学園短期大学教育・福祉センター 研究助成」(2006 年度)を受けた。

また、本稿はその一部を、鈴木慎一郎「保育者養成機関における男子学生への声楽指導の在り方」日本保育学会第 60 回大会発表論文集、2007 年で口頭発表を行った。

- 1 米山文明『声と日本人』平凡社選書 171, 平凡社, 1998 年, 321 頁。
- 2 伊藤勝志「発声・発話学習に関する基礎的研究Ⅴ：大学生の発声能力について」『人文論究』第 56 号, 北海道教育大学函館人文学会, 1993 年, 89 頁。
- 3 小崎恭弘は以下のように記す。

また声楽などは 40 人程度の少人数での授業です。ただでさえ男子学生は少ないのに、クラスを分けてその上選択授業になると、声楽の授業などはクラスに男性は僕一人になってしまうのです。39 対 1 です。そんなある授業で先生が「今日はパートに分けて歌います。男性と女性パートにしましょう!」。それはパートではなく、ソロと合唱隊というのではないのでしょうか。「はい、お坊ちゃん立って!」と促されて一人で歌ったこともありました。

(小崎恭弘『男性保育士物語』MINERUVA 21 世紀ライブラリー 20, ミネルヴァ書房, 2005 年, 9-10 頁)。

その他、以下の文献でも男性保育士を扱っている。菊池恵子・菊池政隆『大きなおうちの奮闘記：男性保育士のいる保育園』北水,

2004 年。ホンネトーク男性保育士座談会「男だからどう、って思ったことないナ」汐見稔幸編『エデュカール』9 月号・第 15 号, 臨床育児・保育研究会, 2006 年, 27-31 頁。

- 4 今川恭子編「保育者養成座談会 保育者としての専門性のために音楽的な視点から育成すべき力とは」における嶋田由美の発言『音楽教育実践ジャーナル』vol. 1 no. 2 (通巻 2 号), 日本音楽教育学会, 2004 年, 40 頁。
- 5 成田眞・小林育子「子どもの自己表現を育てる保育者の発声」『人間福祉研究』第 7 号, 田園調布学園大学, 2004 年, 145-156 頁。
- 6 奥村正子「保育者養成における「声」の指導：「表現」の授業実践を通して」『音楽教育研究ジャーナル』第 23 号, 東京芸術大学音楽学部音楽教育研究室, 2005 年, 25 頁。

その他、話題提供者：奥村正子・今川恭子, 司会進行：阪井恵「どう育てるか、保育者の声」『日本音楽教育学会第 8 回音楽教育ゼミナール“2005” 妙高ゼミナール「音楽教育の実践と研究の新たな展望」報告書』妙高ゼミナール実行委員会, 2006 年, 46-50 頁。

- 7 関連する研究は以下の通り。小畑千尋〔「音痴コンプレックス」を持つ成人男性を対象とした歌唱指導研究』『学校教育学研究論集』第 5 号, 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科, 2002 年, 141-153 頁。小畑千尋〔「音痴」意識の実態：専門学校生・大学生を対象とした意識調査』『音楽教育学研究論集』第 4 号, 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科芸術系教育講座音楽教育研究室, 2002 年, 24-33 頁。小畑千尋〔「音痴」の心理面：成人を対象とした「音痴」克服のための歌唱指導を通して』『音楽教育実践ジャーナル』vol. 2 no. 2 (通巻 4 号), 日本音楽教育学会, 2005 年, 107-115 頁。小畑千尋『「音痴」克服のための指導に関する実践的研究』東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士論文, 2005 年。小畑千尋『「音痴」克

服の指導に関する実践的研究』多賀出版、
2007 年。

- 8 作詞：江間章子，作曲：中田喜直《夏の思い出》畑中良輔ほか『中学生の音楽1』教育芸術社，2006 年，20-21 頁。
- 9 作詞：クッピー，作曲：デンツァ，編曲：鶴由雄《トラのパンツ》CD『けんたろうお兄さんのあそびうた』PCCG-00508 PONY CANYON。
- 10 作曲：Denza，訳詞：津川圭一《フニクリフニクラ（Funiculi Funicula）》右近義徳編『世界名歌選集 中声用』全音楽譜出版社，1993 年，290-293 頁。

フリー百科事典『ウィキペディア』では次のように説明されている。「1880 年にトーマス・クック社によって，ヴェスヴィオ火山山頂までの登山列車「フニコラーレ（ケーブルカー）」が敷設されたが，当初は利用者が少なかった。そこで，同社の依頼を受けたルイージ・デンツァが宣伝用に作曲したのがこの曲である。世界最古のコマーシャルソングとも言われる」(<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)

- 11 学生 A に対しては 2007 年 2 月 7 日に，学生 B に対しては 2007 年 2 月 9 日に対話を行った。